

母牛、狼を突き殺す語（前半＝～p.614）

今は昔、奈良の西の京わたりに住みける下衆の、農業のために家に牝牛を飼ひけるが、子を一つ持ちたりけるを、秋こ、田居に放ちたりけるに、定まりて夕ざりは、小童へ行きて追ひ入れけることを、家主も小童へもみな忘れて、追ひ入れざりければ、その牛、子を具して、田居に食みありきけるほどに、夕暮れ方に、大きな狼一つ出で来たりて、この牛の子を食はむとて、つきてめぐりありきけるに、母牛、子をかなしむがゆゑに、狼のめぐるにつきて、子を食はせじと思ひて、狼に向かひて防ぎめぐりけるほどに、狼、片岸の築垣のちやなるが、ありける所を後ろにしてめぐりける間、母牛、狼に向かひざまにて、こはかにはくと寄りて突きければ、狼、その岸に仰けざまに腹を突きつけられにければ、え動がでありけるに、母牛は、放ちつるものならば、我は食ひ殺されなむと思ひけるに、力を起こして後ろ足を強く踏み張りて、強く突かへたりけるほどに、狼は、え堪へずして死にけり。
牛、それをも知らずして、狼は、いまだ生きたとや思ひけむ、突かへながら、夜もすがら秋の夜の長きになむ、踏み張りて立てりければ、子は傍らら立ちてなむ鳴きける。

問題 問題に指定がなくとも漢字で、「おしい」のは×、「近い」のも×。正解のみ正解。

一傍線部「今は昔、飼ひけるが」を口語訳し、また助動詞を指摘し文法的意味を、一重傍線部の助詞の文法的働きを答えよ。

二傍線部「子を一つ持ちたりけるを」について、口語訳し、また助動詞と助詞を指摘して文法的意味を答えよ。

三傍線部「田居に放ちたりけるに」について、口語訳し、また助動詞と助詞を指摘して文法的意味を答えよ。

四傍線部「定まりて夕ざりは」を口語訳せよ。

五傍線部「小童へ」の読みを答えよ。

六傍線部「追ひ入れけることを」の「を」を文法的に説明せよ。

七傍線部「追ひ入れざりければ」について、口語訳し、また助動詞と助詞を指摘して文法的意味を答えよ。

八傍線部「具して」の意味を答えよ。

九傍線部「田居に食みありきけるほどに」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。また「食み」の読みを答えよ。

十傍線部「大きな狼一つ出で来たりて」を口語訳し、用言を抜き出して品詞を答えよ。また「重傍線部」なる「を文法的に説明せよ」。

十一傍線部「食はむとて」について、口語訳し、この動作の主体を文中の語で答えよ。助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。

十二傍線部「かなしむ」の意味を答えよ。また、このような語のことを一般に何と呼ぶか、漢字五字で答えよ。

十三傍線部「子を食はせじと思ひて」について、口語訳し、助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。

十四傍線部「狼、片岸のめぐりける間」を口語訳せよ。但し、必要な意識は認めるものとする。

十五傍線部「向かひざまにて」を口語訳せよ。但し、直訳できない場合は教科書の脚注に従つものとする。（極力直訳に努めること。）

十六傍線部「にはかに」突きければ」について、主語と連体修飾語を補い口語訳し、一重傍線部の語の文法的意味・働きを答えよ。

十七傍線部「その岸に」突きつけられにければ」を口語訳し、また「突きつけられにければ」を品詞分解し、文法的説明をせよ。

十八傍線部「え動がでありける」を口語訳し、また品詞分解して文法的説明をせよ。

十九傍線部「放ちつるものならば」について、口語訳し、助動詞と助詞を指摘して文法的説明をした方がいいと思います。

二十傍線部「我は食ひ殺されなむと思ひける」を口語訳し、品詞分解して文法的説明をせよ。

二一傍線部「強く突かへたりけるほどに」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二二傍線部「え堪へずして死にけり」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二三傍線部「知らずして」を三字で書き換えよ。（漢字仮名交じりで三字。）

二四傍線部「いまだ生きたとや思ひけむ」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。また、誰が「思ひけむ」と思ったのか、答えよ。ここでは句点がないが係り結びが成立している。理由を説明せよ。

二五傍線部「突かへながら」を口語訳せよ。

二六傍線部「夜もすがら秋の夜の長きになむ」を、助詞に注意して口語訳せよ。また、係助詞「なむ」の結びについて説明せよ。

二七傍線部「踏み張りて立てりければ」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

一 訳「今となつてはもう昔のことだが、奈良の右京区あたりに住んでいた身分の低い人が、農業のために家で牝牛を飼っていた人が」(「の」が「は」(な)人・もの)で、「な)人・もの)が」と訳す。同格の用法)

助動詞「ける・過去、ける・過去」 助詞「同格(の用法・働き)」

二 訳「子牛を一頭もつていた牛を」 助動詞「たり・存続、ける・過去」 助詞「を・連用修飾格、を、連用修飾格」

三 訳「田に放していたが」 助動詞「たり・存続、ける・過去」 助詞「に・単純接続」

四 訳「決まって夕方には」(文脈から「小童」の習慣であつたことが分かる)

五 読み「こわらわべ」(こわらわはへ、も可。)

六 説明「主語、奈良の西の京わたりに住みける下衆の、農業のために家に牝牛を飼ひける」が「子を一つ持ちたりける」を

述語「田居に放ちたりける」としたことを示す連用修飾格を表す格助詞「解答欄に合わせて」連用修飾格の格助詞「等」

七 訳「(牛小屋に)追入れなかつたので」 助動詞「なり・打消、けれ・過去」 助詞「は・原因(理由)」

八 意味「連れて」(「一緒」などtogetherの意味なら可。)

九 訳「田で草を食べて歩き回つてた時」(「あつく」は「歩き回る」。歩くは「あゆむ」なので注意。)

助動詞「ける・過去」 読み「はみ」

十 訳「大きな狼が一匹出てきて」 用言「大きな・形容動詞、出て来たり・動詞」

説明「形容動詞ナリ活用『大きなり』の連体形の活用語尾(断定の助動詞ではない点に注意。)

十一 訳「食べよつた」(「つ」=「言ひつ」「思ひつ」の略だとか。)

主体「大きなる狼」(解答欄が狭けりや「狼」で) 助動詞「む・意志」

十二 意味「いとく思ひ」(「かなし」が「悲しい」と訳せるなら問題にしません。) 一般に「古今異義語」と呼びます。

十三 訳「子牛を狼に食わせまいと思つて」 助動詞「じ・打消意志」(「打消」ではなく「打消」で。)

十四 訳「狼が、片方が崖で土堀のようになっている所を後ろに(背に)こつ歩き回つてた間」

(「片岸」と「築垣せしなる」が「の」にちつて同格。訳は教科書脚注に従へ。)

十五 訳「狼を正面に見する角度で」(直訳すれば「狼に向かう様子で」など。分かりにくいけど。)

十六 訳「母牛は、突然に狼をどつと近づいて突いた」ところ(突いたのび、も可。文法書p.97参照。)

意味・働き「に」は形容動詞ナリ活用「にはかなり」の連用形の活用語尾「は」は偶然条件の接続助詞

(「に」が接続助詞でない点に注意。偶然条件は偶然条件でも可。または「原因・理由の「は」」の解釈も可。)

十七 訳「その岸にのけざつたか」(こつで腹を突きつけられてこつた)で、

品詞分解「力行下二段活用動詞『突きつく』未然形『突きつけ』+受身の助動詞『らる』連用形『らむ』

+強意の助動詞『ぬ』連用形『ぬ』+過去の助動詞『けり』已然形『けれ』+原因・理由の接続助詞『は』

(「完」の「し」が過去の助動詞に付く)強意で訳す。「こつてこつた、これセオリー。)

十八 訳「動けないでいたが」(「え」打消語)で「びぎない」。不可能を表す。)

品詞分解「副詞『え』+力行四段活用動詞『動く』未然形『動か』+打消接続の接続助詞『び』

『え』と「び」の呼称で不可能を表す。「説明を」と問われているのびに「まひ」を答えよ。)

十九 訳「もし放してしまつたのであれば」助動詞「しる・強意、なら・断定」助詞「は・仮定条件」(文法書p.97。大事)

二十 訳「自分はあつと食ひ殺されたつまつたのつと思つた」で、

(「完」の「し」が推量の助動詞に付く)強意で訳す。「きつとこつてこつた」と「きつとこつてこつた」で、

品詞分解「名詞『我』+係助詞『は』+力行四段活用動詞『食ひ殺す』未然形『食ひ殺れ』

+受身の助動詞『る』連用形『れ』+強意の助動詞『ぬ』未然形『な』+推量の助動詞『むす』終止形『むす』

+引用句を受ける格助詞『と』+八行四段活用動詞『思ひ』連用形『思ひ』+過去の助動詞『けり』連体形『ける』

+原因・理由を表す接続助詞『し』

二 訳「押しつけたままにしていたうちに」(「突から」の「ひ」は反復・継続の「ヒヨマンズ」「まひ」は程度よりも時間と訳す。)

助動詞「たり・存続、ける・過去」

二三 訳「耐えられないで死んだ」(「え」打消語)の不可能表現) 助動詞「ず・打消、けり・過去」

三 書き換え「知らむ」で「は」打消接続の接続助詞「もつて」は「打消」+単純接続「こつ」。「もつて」=「む」。

四 訳「まだ生きていると思つたからだろうか」 助動詞「たる・存続、けむ・過去の原因推量」

理由「引用句だから」(理由の説明を求められたときは「〜から」で。「も必要」) 思つた人=「編者」

二五 訳「押しつけたままで」(突きつけたままで、も可。」「ぶ」活用して「〜」は反復・継続を表す上代の助動詞。)

二六 訳「一晩中、秋の夜で長い夜」(秋の夜長に「が」流暢だが、同格を意識して。)

結び「『けり』」接続助詞が付いて、文が終始してないので係り結びが流れて(消滅して)「ん」(文法書p.108参照。)

二七 訳「踏ん張つて立つていた」(「たたくも可。)」 助動詞「り・存続、けれ・過去」

母牛、狼を突き殺す語（後半 = p.615）

これを、牛主の隣なりける小童へ、それもまた、牛追ひ入れむとて、田圃に行きたりけるが、狼の牛をめくりありきけるまでは見けれども、をとなきやつにて、日の暮れにければ、牛を追ひて家に帰り来たりけれども、ともかくも言はでありけるに、かの牛主の、夜明けて、「夜、牛を追ひ入れざりける、その牛は食みや失せぬらむ。」と言ひけるときこそ、隣の小童へ、「御牛は、夜前、しかしかの所にてこそ、狼のめくりありきしか。」と言ひければ、牛主聞きおどろきて、惑ひさわぎて行きで見ければ、牛、大きな狼を片岸に突きつけて動かで立てり。子は傍りに鳴きて伏せり。牛主の来たれるを見て、そのときになむ、狼を放ちたりければ、狼は死にて、みな動かでなむありける。牛主これを見て、あさましく思ひけるに、「夜前、狼の来たりて食はむとてけるを、かく突きつけたりけるに、放ちては殺されなむと思ひて、夜もすがら放たざりけるなりけり。」と心得て、牛をなむ、「いみじくかこかりけるやつかな。」とほめて、具つて家に帰りつけし。

しかれば、獣なれども、魂あり、かこきやつは、かくぞありける。これ、まごこそのほとりなる者の聞き継ぎて、かく語り伝へたることぞ。

問題様 問題に指定がなくとも漢字で、「おしい」のは×、「近い」のも×。正解のみ正解。

一 傍線部「これを、はごこを受けるか、前半部を参照し口語で答えよ。また、どこに係るか、文中の表現から一文節で答えよ。

二 傍線部「牛主の隣なりける」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

三 傍線部「それもまた」について、「それ」が指し示すものを明確にして口語訳せよ。

四 傍線部「牛追ひ入れむとて」を、主語を補って口語訳せよ。また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

五 傍線部「田圃に行きたりけるが」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を、助詞を抜き出して何を表す何助詞かを答えよ。

六 傍線部「の、及び」を、について、何を表す何助詞かを答えよ。

七 傍線部「をさなきやつにて」を口語訳せよ。また、「き」を文法的に説明せよ。

八 傍線部「日の暮れにければ」を口語訳せよ。また、付属語を抜き出して品詞及び文法的意味・働きを答えよ。

九 傍線部「帰り来たりけれども」を品詞分解せよ。

十 傍線部「ともかくも言はでありけるに」を口語訳し、また、この動作の主体は何か、文中の語で答えよ。

十一 傍線部「牛を追ひ入れざりける」を口語訳し、また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

十二 傍線部「食みや失せぬらむ」を口語訳し、また品詞分解し、これでもかと言わんばかりに文法的説明をしなければならぬ。

十三 傍線部「ぞ」は係助詞であるが、結びはどうなっているか、根拠となる部分を明示して説明せよ。

十四 傍線部「狼のめくりありきしか」を口語訳し、また、助動詞を抜き出して必要な文法的説明をせよ。

十五 傍線部「惑ひさわぎて行きで見れば」を口語訳し、また、「ば」何を表す何助詞か、答えよ。

十六 傍線部「なる」は文法的にどのようなものか、説明せよ。

十七 傍線部「動かで立てり」を口語訳し、また品詞分解して文法的説明をせよ。

十八 傍線部「子は傍りに鳴きて伏せり」より助動詞を抜き出し、文法的意味を答えよ。

十九 傍線部「来たれる」を品詞分解して文法的説明をせよ。また、傍線部「なむ」について必要な文法的説明をせよ。

二十 傍線部「みな動かでなむありける」を口語訳せよ。

二一 傍線部「あさましく思ひけるに」を口語訳せよ。

二二 傍線部「狼の来たりて食はむとてけるを」を口語訳し、また、助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二三 傍線部「放ちては殺されなむと思ひて」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二四 傍線部「夜もすがら放たざりけるなりけり」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を答えられるようにしておくべき。

また、「夜もすがら」に対する語を答えよ。

二五 傍線部「心得て」について、これは「動詞+助詞」であるが、動詞の活用形、活用形、終止形に振り仮名を振って答えよ。

二六 傍線部「なむ」は係助詞であるが、結びはどうなっているか、根拠となる部分を明示して説明せよ。

二七 傍線部「いみじくかこかりけるやつかな」を口語訳し、また、用言を抜き出し品詞と終止形を答えよ。

二八 傍線部「獣なれども」かくぞありける」を口語訳し、また助動詞を抜き出して文法的意味を答えよ。

二九 傍線部「かく語り伝へたることや」の意味を答えよ。また、「や」の後に省略されている用言を答えよ。

三十 この物語が収められている書物の題名、及びその文学的分野を答えよ。

三十一 この物語は、全体を通して一定の書き出し、及び結びで統一されている。書き出しと結びの表現を答えよ。

三十二 この物語は、全体である三ヶ所を舞台としているが、それはどこか、現在の国名で合わせて答えよ。

三十三 この物語を題材にした作品を著した近代の作家の名前、及び関連する作品名を二つ挙げよ。

一 受ける部分＝「牛の親子が田で草を食べていたときに狼が来て牛の周りを歩き回っていたこと」(同義なら可)
 係る部分＝「言ひければ」(五行もジャンプ。「」に至るまではひたすら状況の陳述)

二 訳＝「牛主の隣に住んでいた子供」 助動詞＝「なり・断定 ける・過去」(存在を表す「なり」。種類としては「断定」となる)
 三 訳＝「この子供もまた(同様に)」「この家で子供が牛を追い入れることになっていたようだ。忘れた坊の小童へとは別人」
 四 訳＝「牛主の隣に住んでいた子供が、牛を追い入れようとして」 助動詞＝「む・意志」(「と」は「と言いつつ」と思いつつ。)
 五 訳＝「田に行つたが」 助動詞＝「たり・完了 ける・過去」 助詞＝「に・連用修飾格の格助詞」が・単純接続の接続助詞
 六 の＝「主格の格助詞」を＝「連用修飾格の格助詞(動作の対象)」

七 訳＝「思慮に欠ける子供のことなので」(脚注に従つ) き＝「形容詞ク活用」ををなし『連体形』ををなせ『の活用語尾』
 八 訳＝「口が暮れてしまったので」(三元)「過去は」→「つてしまつ」→「つてしまつた」
 付属語＝「の・主格の格助詞」に・完了の助動詞 けれ・過去の助動詞 ば・原因・理由の接続助詞

九 品詞分解＝「ラ行四段活用動詞」帰り来たる 連用形 帰り来たり『過去の助動詞』けつ『已然形』けれ
 + 逆接の接続助詞『とも』(「」) 帰り来たる『一語』たりとか「り」で切れないので注意)

十 訳＝「どうとも言わなかつたので」(「」) は打消接続「」に は原因・理由) 主体＝「牛主の隣なりける小童へ」
 十一 訳＝「牛を追い入れなかつた」 助動詞＝「せり・打消 ける・過去」
 十二 訳＝「草を食へながら今」(「」) が入行つてしまつてゐるのだらうか(「らむ」現在推量「今」は「つてゐるのだらう」)
 品詞分解＝「マ行四段活用動詞」食む 連用形 食み + 係助詞「や」+ 下二段活用 失す 連用形 失せ

+ 完了の助動詞『ぬ』終止形『ぬ』+ 現在推量の助動詞『らむ』係助詞『や』(「」より連体形『らむ』)
 十三 説明＝『言ひければ』の助動詞「けり」が本来結びとなるはずだが、接続助詞『ば』が接続して文が終始していないため

(係り結びが消滅して)流れてゐる。(「」) (同じような説明なら可。採点基準は傍線部が「」抜ける毎に「マイナス」一点が)
 十四 訳＝「狼が(牛の)周りを歩き回つていた」(「」) は主格)
 助動詞＝「しか・過去の助動詞」き が係助詞「」に「」より已然形「しか」となつてゐる。(「せ」・き・しか・。)

十五 訳＝「あわてふため騒いで行つて見たと」(「」) (「惑る」は「あわてふためへ」。「迷つ」と同じ「」)
 ば＝「偶然条件を表す接続助詞」

十六 なる＝「形容動詞ナリ活用」大きなり 連体形 大きなる の活用語尾(断定の助動詞ではないので注意。毎回聞かれています)
 十七 訳＝「動かないで立つていた」 品詞分解＝「カ行四段活用動詞」動く 未然形 動か + 打消接続の接続助詞『で』
 + タ行四段活用動詞「立つ」已然形「立て」+ 存続の助動詞「り」終止形「り」

(文法書によつては「」と訳される「り」を完了としてゐる場合もあるのですが、完了の助動詞としても可。
 同様に「り」はサ変の未然形 四段の已然形に接続となつてゐるが、サ変・四段の命令形とする説もあるのだから可。)

十八 助動詞＝「り・存続」(問十七と同様) 完了でもいへや。存続とは何かを議論したすと長くなるので)
 十九 品詞分解＝「ラ行四段活用動詞」来たる 已然形(または命令形) 来たれ + 完了の助動詞「り」連体形「る」
 二十 訳＝「全く動かないでいた」(「みな」は「全く」) は打消接続「」ないで。「ける」は過去「なむ ける」で係り結び。

二一 訳＝「驚きあきれるばかりだと思つたが」(「あたま」＝「驚きあきれるばかりだ」) ける 過去「」に 逆接)
 二二 訳＝「狼が来て食へようとしたのを」(「」) は主格「を」は準体助詞。(助動詞＝「む・意志 ける・過去」
 二三 訳＝「放したら殺されたと思つた」 助動詞＝「れ・受身 なる・強意 む・推量」(「れ+なむ」ではない。)
 二四 訳＝「一晩中放さなかつたのだなあ」 助動詞＝「せり・打消 ける・過去 なり・断定 けり・詠嘆」(助動詞の集)

反対語＝「ひねます」(漢字)「終口」。知識としてひねる)
 二五 活用の型＝「ア行下一段活用」活用形＝「連用形」終止形＝「心得・」(「ア行下一段活用は「得」「心得」のみ)
 二六 説明＝『ほめて』の助詞『ほむ』が本来結びとなるはずだが、接続助詞『て』が接続して文が終始していないため、
 係り結びが消滅して(流れて)ゐる。

二七 訳＝「たいそう賢いやつたなあ」 用言＝「いみじく・形容詞・いみじく かしこかり・形容詞・かしこし ける・助動詞・けり」
 (「ける」助動詞)も「かな」(終助詞)も詠嘆。「かしこ」は「」では何と「賢い」の意なので不本意。古今同義)

二八 訳＝「獣であっても 思慮があり、賢いやつは」このようにあるのだなあ 助動詞＝「なれ・断定 ける・過去」
 二九 意味＝「このように語り伝えられてゐる」とか「」(傍線部が省略されてゐる) 省略＝「言ふ」
 三十 題名＝「今昔物語集」(今昔物語) は略称・通称。(分野＝「説話集」

三二 書き出し＝「今八昔」 結び＝「」ナム語り伝へタルトヤ
 三三 舞台＝「天竺・インド、震旦・中国、本朝・日本」
 三三 作家＝「芥川龍之介」 作品名＝『羅生門』『鼻』(「ほかに『芋粥』『藪の中』『偷盗』など。『地獄変』は宇治拾遺に取材)

赤シートを使って暗記・確認用にご利用ください。

各傍線・記号は 重要古語・表現(名詞・動詞・形容詞・形容動詞ほか) 助動詞 助詞 係り・結び(または係り・結びの流れ)を表す

今となってはもう昔のことだが、奈良の右京あたりに住んでいた身分の低い人で

今は昔、奈良の西の京わたりに住みける下衆の

農業のために家に牝牛を飼っていた人が、子牛を一頭持っていたのを、秋ごろ、田に牛を放していたが、

農業のために家に牝牛を飼ひけるが、子を一つ持ちたりけるを、秋ごろ、田居に放ちたりけるに、

決まって夕方、子供が行って追ひ入れていたことを、家の主人も子供もみな忘れていて

定まりて夕ざりは、小童へ行きて追ひ入れけることを、家主も小童へもみな忘れて、

追ひ入れなかつたので、その牛が、子牛を連れて、田で草を食へて歩き回つて来た時、

追ひ入れざりければ、その牛、子を見しつゝ、田居に食みあじきけるほじつ、

夕暮れごろに、大きな狼が一匹出てきて、この牛の子を食へたつて、

夕暮れ方に、大きな狼一つ出で来たりて、この牛の子を食はむとつて、

牛の廻子について歩き回つて来たので、母牛は、子牛をこつて思ひがゆえに、狼が歩き回る後さつてつて

しきつめへりあじきけるに、母牛、子をかなじむがゆえに、狼のめぐるしきつて

子牛を食はせむと思ひて、狼に向かつて子をまのめちつて歩き回つたので、

子を食はせむと思ひて、狼に向かひて防ぎめへりけるほじつ、

狼が、片方が崖で土堀のようになっている所を、後さつて、歩き回つて来た間に、

狼、片岸の築垣のやつなるがありける所を後ろにしてめへりける間に、

母牛は、狼を正面に見ゆる角度で、突然に、とつて近づいて来たので、

母牛、狼に向かひなまじつゝ、にはかに、はくとつて突きければ、

狼は、その岸のけぞつたかつしつで腹を押しつけられたので、動けないでいたが、

狼、その岸に仰けなまに、腹を突きつけられ、にければ、え動かでありけるに、

母牛は、もし放してしまったのはあつたが、自分はおかしく喰ひ殺されたつて、つて思つたので、

母牛は、放ちしるものならば、我は食ひ殺されなむと思ひけるに、

力を奮い立たせて後ろ足を強く踏み張つて、押しつけたまをこつて、たつたに、狼は耐(堪)えられないで死んだ。

力を起して後ろ足を強く踏み張りて、強く突かへたりけるほどに、狼はえ堪えずして死にけり。

母牛は、そのことを分らないで、狼はまだ生きついていると思つたのだらうが、

牛、それをも知らずして、狼はいまだ生きたるとや思ひけむ、

押しつけたまを、一晩中、秋の夜で長い夜に、踏ん張つて立つてつたので、子牛はそばに立つて鳴いた。

突かへながら、夜もすがら秋の夜の長きになむむ、踏み張りてはつりければ、子は傍らに立ちつたむむ、鳴きける。

母牛、狼を突き殺す語(後半) 本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用として利用してね。

各傍線・記号は 重要古語・表現(名詞・動詞・形容詞・形容動詞ほか) 助動詞 助詞 係り・結び(または係り・結びの流れ)を表す

「このとき、牛主の隣に住んでいた子供が、この子供もまた、牛を追い入れようとして、田に行きたが

「これを、牛主の隣なりける小童へ、それもまた、牛追ひ入れむとて、田居に行きたりけるが

狼が牛の後をついて歩き回し、たまでは見たが、
思慮に欠ける子供のことなので、

狼の牛をめくりありきけるまでは見られず、
をれなせしつて

日が暮れてしまっ、たので、牛を追って家に帰って来たが、
どうも言わなごうたウジク

日の暮れに「ければ、牛を追ひて家に帰り来たりければ、
とまかくも言はざりけるに、

例の牛主が、夜が明けて、「夜、牛を追い入れなかつた。その牛は草を食へながら今ごろはどこか入行つてしまつてゐるのだが、

かの牛主の、夜明けて、「夜、牛を追ひ入れざりける。その牛は食みやせせぬらむ。」

と言つた時、隣の子供は、「あなたの牛は、昨夜、そむそのウジク、
狼が後をついて歩き回つてごうた、

と言ひけるときにぞ、隣の小童へ、「御牛は、夜前、しかかの所にござ、
狼のめくりありきか。」

と言つたので、牛主は聞いて驚いて、
慌しなためを驚いて行つて見たウジク

と言ひければ、牛主聞きおぼろぎて、
惑ひをわびて行きて見ければ、

牛は、大きな狼を片方が崖のようになつてゐるウジクに押しつけて動かぬよう立つていた。

牛、大きな狼を片岸に、
突きつけて動かで立つて。

子牛はそばで鳴いて伏せていた。牛主が来たのを見て、
そのときこまう、狼を放したウジク

子は傍らに鳴きて伏せり。牛主の来たねるを見て、
そのときなむ、狼を放ちたりければ、

狼は死んで、
全く動かぬでいた。

狼は死んで、
みな動かでなむありける。

牛主はこれを見て、
驚きおめれるばかりだと思つたが、「昨夜、狼が来て食へなごうたのを、

牛主これを見て、
あたましと思ひけるに、「夜前、狼の来たりて食はむとつけるを、

「このとき、おまきつけに、たが、放したウジクと、おまわつて、
「晩中放ちなかつたのだな。」

かく突きつけたりけるに、
放ちては殺されなむと思ひて、
夜もすがら放たたりけるなりけり。」

と心得て、牛をなむ、
「たいへん賢いやうだなあ。」
と褒めて、
連れて家に帰した。

「この話は、
確かにその近くに住んでゐた者が聞き継ごう、
「ウジクに話してはなれごうたウジクに話した。」

「この話は、
確かにその近くに住んでゐた者が聞き継ごう、
「ウジクに話してはなれごうたウジクに話した。」

「この話は、
確かにその近くに住んでゐた者が聞き継ごう、
「ウジクに話してはなれごうたウジクに話した。」

「この話は、
確かにその近くに住んでゐた者が聞き継ごう、
「ウジクに話してはなれごうたウジクに話した。」

「この話は、
確かにその近くに住んでゐた者が聞き継ごう、
「ウジクに話してはなれごうたウジクに話した。」

読解に際して注意すべき点

・助動詞は活用や活用の型を覚える前に、意味や接続をしつかり覚えておくべき。ただし過去の「き」の活用は特殊型なので暗記する。

・接続助詞「は」「が」「に」「を」「と」「格助詞」が「の」「を」「を」「は」「の」の訳し方が「を」「と」が何助詞なのか注意。

・もついで加減係り結びは分かりたい。P108の表は頭に入っていますか。「係り結びの消滅(流れ)」は説明できずか。
・古今異義語に注意。「あま」は「あま」の意味が、「あま」の意味が「なまめかしい」なら問題にならない。聞いたことのある言葉は「あま」を「なまめかしい」。

・前半の「小童へ」及び「追い入れられた牛」と後半の「隣の小童へ」及び「追い入れられた牛」は異なるので注意。同じ様な「ナシ」(牛飼)が「存在してゐる。このへん話が入り組んでゐるので再確認せよ。」